disciplineなきinter-discipline

inter-disciplineということが言い始められてからすでにかなりの歳月がたっている．そのためか，inter-disciplineというのは，disciplineの確立があってはじめて意味をもつのだ，という初期の認識が失われ，安易に解釈され始めているのではないかという懸念がある．

天才は(前世でdisciplineの訓練を卒業してきたためか)とっくにdisciplineを超越しているが，普通の人はdisciplineの中にあって，基礎から1歩1歩努力して学ぶことによって，次第に明らかにされてゆく体系的知識を習得し学問のおもしろみ，深さあるいはおそろしさを味わい，その精進の過程の中に，自己の精神を向上させてゆくのではないだろうか．

disciplineというものは何も学問に限られない．ピアノやヴァイオリンの演奏などは音楽のdisciplineの典型だし，世阿弥の花伝書は能というdisciplineの訓練の指導書である．囲碁や将棋でも，専門家の修業はまさにdisciplineのそれである．

近隣にはだれ1人としてかなう者のいない，将棋の天才少年が，専門家の卵の集まりである奨励会に入ると，先輩たちから，2枚落ちでさんざんに負かされ，罵倒され，すっかり自信を失ったところから，本物への修業が始まるのである．井の中の蛙が白日にさらされ，対象に対して，謙虚に，少しもたゆまず最善を尽さなければ，本物になれないことを，少年は知るのである．

偽せ物の，disciplineの試練を経ない，inter-disciplineの流行は，現代の大衆社会という世相に支えられているように思える．わかりやすいこと，役に立つこと，誰にでもできることを宣伝文句とするが，安っぽく俗であるため，やがてうんざりしてすぐあきてしまう．それでも大衆の迎合がやまないのは，経済の原則が原因なのだろう．誰にでもわかる入門書や，テレビドラマは多くの大衆が買うし，見る．出版社やテレビ局としては，そのような本を出版し，そのようなドラマを放送しないわけにゆかないから．しかしイエスをはりつけに掛けたのはユダヤの民衆であり，ヒットラーを，いつも90%以上の支持率で熱狂的に台頭させたのは，ドイツの民衆であったことを忘れてはならない．

ORは役に立たない，むずかしい，学会の発表を聞いてもわからないから，もっと誰にでもわかるような発表の仕方をしてほしい．論文誌を読んでもわからない，こんなものが何の役に立つのかという声をこのごろ頻繁に耳にする．しかしORがもし，「実際に役に立つ」ということだけを錦の御旗とし，単に既成のdisciplineの成果から，役に立つことだけを借用することに終始し，学問的な深い掘り下げを怠ったら，まさにdisciplineなきinter-disciplineに堕してしまうであろう．

「役に立つ」ということの定義は何なのか．それは単に企業が利潤をあげることに役に立つことを意味するのだろうか．長い伝統のある体系的知識を積み上げて，やがて人々の魂を感動させ，精神を向上させるような文化的業績は役に立つとは言えないのか．

inter-disciplineの創説者ともいうべきN. Wienerは，彼の著書「人間機械論」(池原止才夫訳，みすず書房，昭和34年)の中で，かつてのヨーロッパの学生に教養としてたたき込まれた古典である，ギリシャ語とラテン語の教育を，アメリカではそれが誰の目にも役に立たないものであるという理由で，廃止してしまったことがアメリカ文化の荒廃の原因となったのだということを力説している．

日本は明治維新以来，西欧の育てた木からその果実だけをとり，木を植え育てることをしなかったという批判がなされている．ORがdisciplineの育てた木からの果実をとるだけで，他のdisciplineに発展の刺激と素材を与え，新たなdisciplineを生み育てることをしないならORはとても本物の学問にはなり得ないであろう．

最近，心ある人々から，ORはつまらなくなったという言葉をしばしば耳にする．そこには探究すべき問題がないから，魂に感動を与える文化が枯渇し始めたから．

disciplineなきinter-disciplineがはびこるとき，文化は不毛に終わるだろう．　(τ)

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．